

行政視察報告書

令和4年10月13日

西脇市議会
文教民生常任委員会

1 視察実施日

令和4年10月13日（木）

2 視察先

芦屋市立打出浜小学校、打出教育文化センター（芦屋市）

3 視察事項

小中学校におけるICTの活用状況について

- ・児童生徒のタブレットを含めたICT機器の活用状況について
- ・教職員のICT活用スキルアップのための研修について
- ・ICT支援員やICTサポーター制度の活用について

4 参加者

文教民生常任委員会

委員長 東野 敏弘

副委員長 高瀬 洋

委員 藤原 秀樹 藤原 哲也

高瀬 弘行 吉井 敏恭

林 晴信 (村岡 栄紀 欠席)

事務局 春岡 香織

所 感

東野 敏弘

芦屋市小中学校における I C T の活用状況、I C T 教育の取組は、県下でも先進的だと言われています。芦屋市は、西脇市と同様、ベネッセの「ミライシード」を活用していることもあり、芦屋市の取組から学ぶべきことは多いと考え計画しました。

視察の目的は、芦屋市小中学校における I C T の活用状況について、①児童生徒のタブレットを含めた I C T 機器の活用状況②教職員の I C T 活用スキルアップのための研修③ I C T 支援員や I C T サポーター制度の活用の 3 点でした。

(打出浜小学校の授業参観)

打出浜小学校は、芦屋市での I C T 教育の先進校でした。5 年生理科と 6 年生家庭科の授業を見学させていただきました。

5 年生理科（天候を調べる授業）は、教師の指示で、iPad で写真を撮り、気づいたことをコメントにまとめ提出します。投稿が終わった児童は、空いた時間の有効活用として読書をします。全員の投稿が終わると、担任の先生が投稿された内容を紹介し、コメントを加えていました。I C T 支援員の方が机間巡視をし、遅れていると思われる児童にアドバイスしていました。その後、カフート（Kahoot!）を使って、天候についてクイズ形式で答えさせていました。担任の事前準備が大変だと思いましたが、児童は楽しく取り組んでいました。

6 年生家庭科の授業は、「おいしい給食」をテーマに、6 人のグループワークでした。家庭科室で学習してきたことを、教室でグループごとに話し合い、iPad にまとめ、動画で撮ることも話し合っていました。

iPad の操作は、5 年生・6 年生ともスムーズで、文字入力、ローマ字入力でした。担任と支援員の役割分担も明確なようでした。

(芦屋市の I C T 教育の取組)

芦屋市の I C T 教育の目的は、「主体的対話的で深い学びの充実に向けた I C T の効果的な活用」におき、教師の授業構想力を礎とし、「授業の効率化」「個別最適化」「学びの深化」を I C T の機能によって生み出したいとしています。

芦屋市では、iPad を全児童に支給し、ベネッセのミライシードを活用し、リモート授業（外部施設との連携・出席停止等）を行い、アプリも積極的に活用しています。また、各学校での取組のデータベース化を行い、実践事例集として全教師に配布しているとのことでした。

教師のスキルアップのための研修は、夏季研修で教科等における情報活用型プロジェクト学習や配慮を要する児童生徒への支援、アクティブラーニングを実現する授業デザイン、初任者研修、情報セキュリティに関する研修等を行っているほか、各個人によるスキルに差があるため、ICT活用事例集の作成、出前研修、ICT支援員による個別指導を行っているとのことでした。

教職員に関わるICT支援員は、打出教育文化センターに2人常駐、学習系は3人を11校に分散配置し、週1～2回学校訪問しているとのことでした。西脇市より規模が大きいですが、ICT支援員は多くありません。支援員は不足しているかとの問いに、『多いに越したことはないが、むしろ教師間・児童生徒間で教えあう取組が大切だ』と話されました。

芦屋市では、打出教育文化センターが中心となり、市内11校のICT教育を推進しています。打出教育文化センターのように、ICT教育に専門的に継続して取組を進める体制を構築することが大切だと思います。

新しく始まったICT教育の事例集を作成することで、教師の取組の意欲づくりと教師間格差の是正に役立てていると感じました。また、教師のスキルアップのための研修は、計画的に行われていることも、打出教育文化センターの果たしている成果だと感じました。

高瀬 洋

芦屋市は面積18.5km²、人口95,000人。市立の小学校数8校、中学校数3校となっており、西脇市と比べると、面積が約7分の1、人口が2倍以上、公立学校の数ほぼ同じという条件の違いはありますが、今回の視察で感じたことは次の通りです。

まず、芦屋市はICTを活用した教育システムがほぼ出来上がっており、また、ICT教育をサポートするスタッフや教職員の体制、活動内容も明確になっています。後は、日々の教育を実施しながら、ICTの活用事例を蓄積し、教職員の間で水平展開することにより、レベルアップするようになっていくと感じました。

近場に各学校が集まっているということは、日々運営する上では恵まれた環境にあると想像しますが、具体的な活動等を挙げると次のようなものがあります。

- ①月2回、ICT活用について支援員が集まり情報共有している。
- ②ICT活用事例集を作成し、市内の学校で水平展開している。
- ③学校内のサーバーの運用状況はクラウドで見られる。

(よく使われている支援ソフト等の運用状況が見られる。)

- ④iPadは電池持ちが良いので、週2回程度、家庭で各自が充電してい

る。

- ⑤一般研修、夏季研修、新人研修などで職員のスキルアップを計画的に行っている。等

芦屋市は、県内でもICTを使った教育が進んでいるということで視察しましたし、西脇市と芦屋市は同じ協力会社のサポートをいただいていますので、参考にできる部分は取り入れていければいいなと思いました。また、芦屋市のICT活用事例集も見せていただくことになりましたので、今回の視察を生かして、議会でも、ICTを活用した教育について検討していきたいと思えます。

藤原 秀樹

今回、芦屋市のICT教育を視察して、やはり今回もiPadを採用されており、西脇市ではICT教育の前の段階での問題が大きいと思えます。芦屋市では、週に2回iPadを持ち帰り、家庭で充電するだけで十分学校で使用できていました。教室で誰一人フリーズすることなく、操作もしやすく、ほぼ教室の全員が操作で困っていることはなかったように思いました。芦屋市でiPadを採用された理由は、バッテリーの持ち、操作性（携帯市場では一番売れている）、管理のしやすさ（アプリ）などでした。今年度もリモート授業のために95台追加購入されました。iPadにはカメラ、マイク、送信機能が一体化されており、安易にリモート授業の送信端末になるからです。

最初に6,500台のiPadを購入され、初期設定等は教育委員会の担当者と会計年度任用職員で全て行い、その時の会計年度任用職員の中から、ICT支援員を採用されたそうです。理にかなった採用だと思えました。ICT支援員は、ヘルプデスク的な教職員へのサポート班と、学校巡回を主とした児童生徒及び教職員へのサポート班の2班体制で、教育委員会の担当者などもしっかりしており、横のつながりも考えられており、しっかりしたサポート体制を整えられているという印象です。

「1人1台iPad活用研究部会」という小中学校の教員16人から始まり、現在は「『主体的・対話的で深い学び』を目指した授業改善部会」として活動されており、教員自らどう活用すればより良い教育になっていくのかを研究されています。

広報誌でのICTスクール構想の説明特集も、まるで雑誌の記事のように分かりやすくオシャレにきれいにできていました。ICT教育の未来が想像できるような紙面になっていました。

西脇市の教育委員会にもこの感覚を持ってほしいと思えました。コピー用紙に文字がびっしり並んだ説明では、市民の皆様には理解されないと思えます。

教育の内容の前に西脇市では、つまりいているのではないのでしょうか？ハードの状況、市民の皆様への広報、これからもしっかり学んで、しっかりした夢のあるICT教育にしていかなければならないと思いました。

その他に打出浜小学校の生徒たちの読書習慣にはびっくりしました。素晴らしい習慣だと思いました。

藤原 哲也

今回の視察目的は、県下でもICT教育が進んだ芦屋市の小中学校におけるICTの活用について、以下3点についてであります。また、その中で芦屋市立打出浜小学校の5年生は理科、6年生は家庭科の授業を見学させていただきました。

- ①児童生徒のタブレットを含めたICT機器の活用状況
- ②教職員のICT活用スキルアップのための研修状況
- ③ICT支援員やICTサポート制度の活用状況

授業を見学させていただいた打出浜小学校は、芦屋市でもICT教育の先進校であるとお聞きしました。生徒が使用するタブレットはiPadでありました。ソフトは西脇市と同様のベネッセですが、タブレットに関してはiPadが一番使いやすいという結論で、芦屋市ではiPadを使用していました。

5年生の理科授業では、当日の天候の写真を撮り、気づいたことを一人一人がタブレットでベネッセのミライシードにアップし、教師使用の大きなモニターでクラスの生徒と共有し、自分の意見をスムーズに発表していました。

6年生の家庭科の授業では、タブレットを使用して、各班に分かれて12月の給食のレシピを作成していました。見学させていただいた授業では、給食のレシピ作成までの内容でしたが、各班の生徒がタブレットのミライシードで共有して意見を出し合い、レシピをまとめていました。

説明では、出来上がったレシピをクラスで班ごとに発表し、1位に選ばれた班の給食のレシピが、12月の給食のメニューに採用されるそうです。

子どものやる気を引き出し、結果を形にできることは、良い取組だと感じました。

今回授業の見学をさせていただき、一番感じたことは、子ども達がタブレットをスムーズに使いこなし、授業中タブレットが動かない等の不具合で困っている場面がなかったのが印象的でした。

教職員のICT活用スキルアップのための研修については、教師の「授業構想力」を礎とし、「授業の効率化」「個別最適化」「学びの

深化」をICTの機能によって生み出してほしい、との芦屋市教育委員会の方針のもと、効果的な活用方法のデータベース化を行い、実践事例集も配布し、学校のニーズに応じて研修されていました。その他、一般研修、夏季研修、初任者研修、情報セキュリティ研修等、充実した教職員のフォローアップ研修がされていると感じました。

次に、ICT支援員やICTサポートに関しては、芦屋市の打出教育文化センターを中心に2人が常駐し、市内の11校の学校にはICT支援員として3人が週1回は訪問しているとの事でした。芦屋市は、西脇市よりクラス数が多く規模が大きいので、西脇市よりサポート数は生徒数から考えると少ないようですが、見学した授業でも、先生からクラスの生徒に対し、「終わった人は他の友達に教えてあげて下さい」との呼びかけをされていました。子ども同士が教え合うことで、フォローが出来ているようでした。

子ども同士で教えるような仕組みは大切だと改めて実感しました。

高瀬 弘行

① 視察の概要

最初に打出浜小学校の5年生の理科、6年生の家庭科の見学を行った。授業内容の概要として、理科の授業では、天気の変化の学習で、空の観察を行い、気温、天気、雲の量・色・形・動きを各自がタブレットに映像として記録を行い、その結果を大型モニターで共有し、雲の量や動きは、天気の変化と関係があることを学んでいた。全員の記録が終了した後、天候に関する質問を「YES、NO」の投票形式で回答を求め、その結果が示され、正解であれば加点され、これまでの累計の一覧表がニックネームで表示されていた。家庭科の授業では、4班に分かれて「Evolution Lunch」をテーマとして、①旬の食材、②環境、③価格の3条件を考慮した上で、1食分の食事の計画を立て、その際に、タブレットのインターネット機能を活用し、材料の種類や特徴を調べ、①テーマ（和、洋、中）②主食、③主菜、④副菜、⑤汁物／デザートの内容を決定し、その食事の「PRのためのプレゼン資料」を作成していた。その後、本来なら、調理までするようであったが、コロナの関係で、各班の食事内容を先生が料理して、「食べ比べ」を行い、人気メニューを投票で決定するようであった。

その後、打出教育文化センターにおいて、「芦屋市におけるICTの活用状況」について、1時間半にわたって説明を受けた。授業では、動画や音声記録などの活用（例えばメダカの誕生記録など）、大型モニターによる児童一人一人の理解度の把握、児童間の考えの共有などに利用されていた。その他、濃厚接触などによる休暇では授業見学、外部研修では、修学旅行の関係で、広島の被爆体験者とのweb

会議などに利用されていた。また、ICT支援員については、教職員の支援者として業者派遣2人、学校巡回として会計年度任用職員3人の配置がされ、各学校を週に1～2回、巡回が行われていた。

② 所感

芦屋市では令和3年1月にタブレットが配置され、既に1年半を経過しており、いずれも30分程度の授業見学であったが、理科では各個人が、また家庭科では班として共有しており、限られた時間で、限られたクラスであったが、タブレットの取扱いに関しては、大きな課題はみられなかった。

タブレットは「充電の性能」、「画面の鮮明度」、「操作性」からiPadが選択されたとのことであったが、西脇市ではWindowsが採用されており、教師が扱い慣れている点や価格が考慮されたかと推測するが、今後の「買い替え」時の検討課題になるだろう。

ICT支援員に関して、「整備基準（4校に1人）」では、3人の配置に留まるが、市長や議会の理解により、5人の支援員を配置しているということであった。しかし、「支援員が多ければいいというのではない。支援員に教師が頼りすぎるという弊害も考慮する必要がある。」との見解は、傾聴に値するものであった。

また、芦屋市が兵庫県でもICT教育に関して先進地と言われているのは、ミライシード（授業支援ソフト「オクリンク」・協働学習支援ソフト「ムーブノート」・デジタルドリル教材「ドリルパーク」）の活用実績によるものであった。しかし、その根幹をなすのは、教師の授業構想力であり、充実した構想力をICT活用プロジェクトなどで、ミライシードに反映された結果であった。また、それを補っているのが、教師に対するICT支援員の存在であるだろう。

一方、現実問題として、教師間の利活用などの格差は解消しきれておらず、必要なスキルが変遷する中で、恒常的なスキルアップをどう図るかが新たな課題となっていた。そういった意味では、多治見市で活用されている「ICT活用ガイドブック for Teachers」があれば、ICT活用に関する先生方のスキルの水準化には役立つのではないかと考える。

吉井 敏恭

ICTの可能性を生かした学習活動の取組について多治見市立笠原中学校に続き、芦屋市打出浜小学校を視察した。芦屋市ではiPad（Apple社・32GBモデル）を学習用端末としている。ペンシルは児童の任意（必要により個人で購入して準備）により使用が認められている。視察したクラスでは少数のペンシル使用が確認された。

5年2組の理科では、Kahoot!（クイズ大会を開ける無料のアプリ

ケーション)による「雲と天気」のクイズ形式での授業を視察した。iPadを活用して可能となる授業の形式である。一人ひとりの考えをリアルタイムに共有することができ、活発な意見交換が確認できた。

また、先に入力(課題)を完了した児童が、少しの間をみて教室に備付けの図書を読む習慣を確認した。打出浜小学校では課題に応じた図書が教室や廊下に並べられ、授業に活用されているとのこと。図書離れの防止からも素晴らしい取組である。

続く6年2組の家庭科では、グループに分かれての「Evolution Lunchを考えよう」と題した授業を視察した。ここではACERA1150i(動画教材や発表資料など、iPadの画面をワイヤレスで大画面に提示)を活用して動画や発表資料を作成するものであった。2クラスの視察でiPadの活用が十分に確認できた。

また、校内では学習用端末機器の充電保管庫は見受けられなかった。

次に、教育文化センターに移動して、ICTを活用した教育に取り組む担当者(学校教育課および打出教育文化センター)において説明と質疑に対応いただいた。

質疑応答ではiPad導入(選択)の理由について確認した。

- ①先に視察した多治見市と同様、iPadの使い易さ(操作性)である。当初、Windowsが各校に配布されたことを経験しての選択である。
- ②バッテリーの充電効率がよいこと。週に2度ほど自宅に持ち帰り充電することにより使用が可能であること。
- ③画像が鮮明である。西脇市における「黒板の文字が不鮮明」との苦情も解消できる鮮明度である。カメラとしてのiPadの使用にも何ら支障がない。

多治見市と共通する選択理由を伺うと、西脇市においてWindowsを選択したことが、GIGAスクール構想推進の妨げになるのでは…と一抹の不安を覚えた。

また、オクリンク(発表資料・ノートの制作に役立つ授業支援ソフト)、ムーブノート(協働学習の授業支援ソフト)等、ソフト活用実績が株式会社ベネッセコーポレーションにより一括管理され、ICTの効果的な活用に使われているとのことである。

本年、コロナウイルス対策として、iPad(キーボード無し)95台を拡充し、家庭とのリモートに活用するとのことであった。

授業の様子、担当者の話を聞いて、ミライシードの活用率が県下1番で、ICT先進地であることを最認識した。

西脇市においては、機器更新時におけるWindowsの検証の必要性、図書の団体貸出(読書活動支援)とICT組合せも検討の余地があるのではないかと感じた。

西脇市と同じシステムを使っていると聞いていたが、確かにベネッセのアプリは使っているものの、タブレットはiPadだし、ICT支援員も直接雇用で、ベネッセと関係なく元教師等だった。

GIGAスクール構想の要は「鉛筆やノートのようにタブレットを使う（タブレットは文房具のひとつ）」「ICT環境の整備は手段であり目的ではない」ことにある。DX（デジタル・トランスフォーメーション）と同じ考え方ともいえる。当たり前なのだけれど、GIGAスクール構想とは学校教育DXの一環であることを忘れてはいけないうらう。

多治見市での視察でも感じたが、芦屋市でも同様で、タブレットが上手く使えているかなどはすでに論外になっている。鉛筆が上手く使えているか危惧しないのと同義である。西脇市内の小中学校を視察したのが5月で、正直、その当時はその域には達していなかったもので、多治見市を見たときは少し驚いたものだが、あれから5か月経っているので、恐らく西脇市でも同じ状況になっているのではないかと期待している。その確認も早急にしたいと思っている。

また、ベネッセでは、市内各学校がどのアプリをどのくらい使っているかの統計も提出していると聞いた。芦屋市教育委員会では、そのデータを活用して必要な手段を講じているとのことだったが、西脇市教育委員会ではどうなのか。どのような頻度でチェックし、どういう手段を講じているのか気になるので、これも聞かねばならないと考えている。

ICT支援員がどの程度教師の授業構想に関わるのか、という点でも、多治見市では関与の度合いも多いようだったが、芦屋市では尋ねられたらアドバイスを返す程度と関与は薄かった。芦屋市では小中で6,000人以上の児童生徒数に対し、支援員が3人なので、そこまで手が回らないということもあるのかもしれない。では、西脇市はどこまで関与しているのだろうか。

授業に関して言えば、芦屋市ではICT活用事例集をデータベース化して教員間での共有を図っている。もちろん西脇市でもやっていることとは思いますが、事例のストックがどの程度出来ているのかも気になるところである。芦屋市では300事例以上とのことだった。

と、書いているように、我々も他市への視察を重ねることによって、見るべきポイントも理解できてきたように思う。ここで、もう一度市内小中学校を視察することにより、前回では見えなかったものも見えてくるように思うし、前回からの改善点や、補正予算で導入した機器がどう上手く活用されているのか含めチェックできるように思う。できれば、11月中に管内視察を行うべきと考える。

授業の中身で興味深かったのが、理想の給食レシピを考えるという家庭科の授業だった。クラスを5～6人の班に分けて調査・研究・対話・レシピ作成・プレゼンを行うコンテスト方式で、市内で最優秀は実際に給食で提供されるというものだった。ICTを使った検索技術、食育、調査→対話→討議→意見集約→プレゼンテーションの学びと実践の場となるだろうし、教育の要素が全て入っているんじゃないだろうかと感心することしきりだった。同じような要素が入った授業は西脇市でも行っているだろうとは推測するが、私らの頃とは随分と違ったものだと羨ましくも感じた。

最後にデジタル・シティズンシップ教育について尋ねたが、「大事なことだとは思いますが、正直今はまだ手付かずで、今後の課題と思っている」とのことだった。